

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：35401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04512

研究課題名（和文）音楽家の耳 トレーニングと『聴覚』の敏感期の音楽基礎教育「聴く活動」の構造化

研究課題名（英文）The structuralisation of "The Musician's Ear Comprehensive Training in Musicianship" for the Fundamental Music Program in "The Sensitive Period of Hearing"

研究代表者

田中 晴子（Tanaka, Haruko）

エリザベト音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：00573081

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：幼児教育現場で音楽基礎教育「聴く活動」の実践研究を行った。聴取、模倣、表現を含む音楽基礎教育システム「音楽家の耳 トレーニングとモンテッソーリ教育の教える技法「提供」を応用した「聴く活動」は「聴くこと」を重視し「教える」のではなく音楽を捉えることを「援ける」教授法である。「聴く活動」を構造化し音楽基礎教育プログラムの開発を目指す。研究協力者の急逝により難航した。保育者養成校での実践研究とアンケート調査、卒園生の追跡調査により「聴くこと」の重要性は明らかになった。試行錯誤しながら行った実践研究の内容を整理し使用曲の使用法をまとめた。「聴く活動」の仕組みが明らかになり構造化を進める一歩となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児期の歌う、簡易な楽器を演奏する音楽活動に対し、「聴くこと」を中心とした音楽基礎教育「聴く活動」は、実際の音楽作品を課題として用いる「音楽家の耳 トレーニングとモンテッソーリ教育の「提供」（presentation）「して見せる」を応用し、「教える」ことが中心となっている幼児教育現場において、一緒に「聴くこと」を通して、自然な音楽の流れを捉えることを「教える」のではなく「援ける」教育である。「聴く活動」の実践により子ども自ら音楽の仕組みを発見し、積極的に聴くようになった。3つの異なった過程を経て「自分のものにする」という「発見の構造」との共通点から「構造化」を目指したが未だ途中である。

研究成果の概要（英文）：An experiment testing the effectiveness of a fundamental music education in early childhood, primarily through "listening" was conducted in preschool classrooms. A fundamental music education system, "The Musician's Ear" composed of listening, imitating and expressing and the Montessori Educational method, "presenting" was integrated to create "The Listening Activity" for this study. This exercise focuses on the students "listening", requiring the teachers to merely guide the students in this process instead of "teaching" them. However, due to the sudden death of a , the structuralization of this music program faced some difficulties. Experimentation, survey, and follow-up investigations showed the importance of "listening". Through the trial and error process of data organization, the best pieces to use and the best way to use such pieces were identified. The mechanisms of "The Listening Activity" became clear and has brought the system one step closer to completion.

研究分野：演奏に直接結びつく音楽基礎教育。「聴くこと」を中心とし、幼児教育における基礎教育のあり方を研究。

キーワード：音楽基礎教育 幼児音楽教育 音楽家の耳 トレーニング 聴覚の敏感期 聴く活動 構造化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の幼児期の音楽活動においては、音楽は感性と表現に関する領域にあるが、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする表現に比重が置かれていることが多く、「聴くこと」があまりなされていないことに注目した。

(2) エリザベト音楽大学で開発した音楽基礎教育システム「音楽家の耳 トレーニング」は、読譜力のみでなく、楽譜を用いずに耳のみで音楽の諸要素を音楽の流れの中で瞬時に捉え、即座に反応する能力をも育成することを目的として開発された教育法である。「聴くこと」を重視することから、幼児期からの導入が可能である。

(3) 「音楽家の耳 トレーニング」システムが平成 19 年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム (特色 GP)」に採択されたことに伴って開催されたシンポジウムで、参加者の一人であったモンテッソーリ教育関係者から、その教育理念に共通する部分が見受けられるとの指摘を受けたことから、『聴覚』の敏感期にこそ、「聴くこと」を重視した音楽基礎教育が重要であると考えた。

(4) 「教える」ことが中心となっている幼児教育現場で子ども自らが積極的に音楽を捉えることを「援ける」教育が重要であると考えた。

(5) (1)~(4)の背景から幼児教育現場で音楽基礎教育「聴く活動」の実践を開始し、子どもらの反応・姿からその重要性を痛感した。

(6) モンテッソーリ教育関係者 ((3)と同一人物) が、哲学者 (B. ロナガン 1904~1984) の「発見の構造」がモンテッソーリ教育の諸部分を構造化し説明する上で有効であるとしたことから「聴く活動」もまた構造化し得ると確信を得た。「発見の構造」とは、「感性」で「経験」したことが、「知性」で「理解」され、「理性」で「判断」されるという3つの異なった過程を経て「自分のものにする」というものである。「聴く活動」を構造化することで、幼児自らが音楽を捉えようとするを一層「援ける」音楽基礎教育となると考えた。

2. 研究の目的

(1) 幼児期の音楽活動において「聴くこと」を重視し、自ら音楽の流れを捉え、「音楽する」ための基礎教育プログラムを開発する。

(2) 実際の音楽作品を課題として用いる音楽基礎教育システム「音楽家の耳 トレーニング」とモンテッソーリ教育の教える技法「提供」(presentation)を応用し、一緒に音楽を「聴くこと」を通して「教える」のではなく、音楽の流れの中で自然に音楽の諸要素を捉えることを「援ける」教授法を体系化する。

(3) 『聴覚』の敏感期に聴く曲のリストを作成し、教授法とともに教材集を作成する。

(4) 哲学者 (B. ロナガン 1904~1984) の3つの異なった過程 («感性」で「経験」したことが、「知性」で「理解」され、「理性」で「判断」される) を経て「自分のものにする」という「発見の構造」を参考に「聴く活動」を構造化し、幼児自らが音楽を捉えようとするを一層「援ける」音楽基礎教育プログラムとして開発する。

3. 研究の方法

(1) 実践研究については、幼児教育現場、「聴く活動」を経験した卒園生、保育者養成校の学生を対象に行った。

幼児教育現場における「聴く活動」として、研究協力者の園 (広島市内の私立幼稚園) の協力を得て継続的に行い、記録した。

- ・対象：3~5 歳児、同年齢のグループ、1 グループ 15 名まで

- ・時間：午前中 1 グループ / 15~20 分

- ・場所：実施園の部屋

- ・配置：園児らが実施者を半円で囲む

- ・音楽の媒体：CD

- ・記録方法：ビデオ撮影。その映像をもとに実践内容、園児らの反応をまとめ、実践園の教員の所見も加える。

- ・選曲：まずは 2 拍子、曲の基本的なテンポが中庸、曲の長さは、1 分半~2 分程度、変化・違い・特徴がわかり易い曲を中心に園児の様子を見ながら、試行的に選曲。

- ・内容：「音楽家の耳 トレーニング」を活用

- ・研究協力者の立ち会いのもとで実施するが、研究協力者は客観的に見るのみとし、実践後、実施者とディスカッションする。

「聴く活動」を経験した卒園生を対象に追跡調査としての「聴く活動」を研究協力者の園（広島市内の私立幼稚園）の協力を得て継続的に行い、記録した。

- ・対象：小学1年生～4年生、同学年のグループ、1グループ15名まで
- ・時間：土曜日の午前中 1グループ/20～40分
- ・場所：実施園の部屋
- ・配置：小学生が実施者を半円で囲む
- ・音楽の媒体：CD
- ・記録方法：ビデオ撮影。その映像をもとに実践内容、卒園生の反応をまとめ、実践園の教員の所見も加える。
- ・選曲：在園中に行った「聴く活動」使用曲を参考に試行的に選曲。
- ・内容：音楽家の耳 トレーニングを活用
- ・研究協力者の立ち会いのもとで実施するが、研究協力者は客観的に見るのみとし、実践後、実施者とディスカッションする。

保育者養成校における「聴く活動」として研究分担者の研究機関である保育者養成校の学生を対象に行い、記録した。

- ・対象：保育者養成校1年生～2年生、同学年のグループ、1グループ20名まで
- ・時間：1グループ/20～30分
- ・場所：保育者養成校の教室
- ・配置：学生が実施者を半円で囲む
- ・音楽の媒体：CD
- ・記録方法：ビデオ撮影。その映像をもとに実践内容、学生らの反応をまとめ、保育者養成校教員の所見も加える。
- ・選曲：幼児教育現場における「聴く活動」の導入時に使用する楽曲。2拍子、曲の基本的なテンポが中庸、曲の長さは、1分半～2分程度、変化・違い・特徴がわかり易い曲。
- ・内容：音楽家の耳 トレーニングを活用

(2) アンケート調査については、保育者養成校における「聴く活動」に参加した学生、見学教員を対象に行った。調査内容は「聴く活動」の感想及びこれまでの音楽経験、日ごろの音楽の聴き方などについて。

(3) 「聴く活動」で使用する曲のリスト作成については、幼児教育現場での実践研究を積み重ねる中でその使用頻度、「聴く活動」の内容などから取捨選択を行った。

(4) 「構造化」の研究については、モンテッソーリ教育関係者の協力を得て、B. ロナガンの「発見の構造化」の研究を進め、「聴く活動」の構造化を進める。

(5) 事例集作成については、使用曲リストと「聴く活動」を構造化した教授法から作成する。

4. 研究成果

(1) 実践研究の成果として、同じ研究協力者の園で継続的に行ったことにより、園児ら自身の音楽を聴く姿勢の変化、年齢による反応の違いなどが浮き彫りとなった。しかし、園児らにアンケートを取る、インタビューすることの難しさ、園児らのコンディションが休み明け、行事の前後、家庭環境の変化などに左右されることから、客観的な考察をするに至らなかった。また卒園生を対象に追跡調査として「聴く活動」を行ったことで、土曜日の午前中に集まって来る小学生らが音楽を聴くのを楽しみにしている様子、「聴く活動」を経験していない小学生とともに音楽を聴いた際の態度の違いなどから、音楽を自ら積極的に捉え、内容を踏まえている様子を窺い知ることができた。しかし、まだ4年間の実践であるために客観的な考察をするには困難であった。一方、保育者養成校における「聴く活動」に参加した学生らの様子から、音楽を専門としていない学生、あるいは日ごろ所謂クラシック音楽を積極的に聴かない学生らも、「聴く活動」に積極的に参加していたことから、「教える」のではなく、音楽を捉えることを「援ける」ことの重要性が明らかとなった。また、学生らを対象として行った同じ内容を幼児教育現場で年少の園児を対象に行っていることを伝えると非常に驚き、子どもの可能性についても考える良い機会となっていた。

(2) アンケート調査の結果から、保育者養成校における「聴く活動」に参加した学生らのほとんどが、「聴く活動」を楽しいと感じ、積極的に参加していたことがわかった。教えられるのではなく、自ら音楽を捉えていくことを楽しんでいくことがわかった。また、日ごろ親しんでいない分野の音楽に対して、素直に心を動かすことができるように導くことができたことは大きな意味があるといえる。

(3) 「聴く活動」で使用する曲のリスト作成については、実践研究を積み重ねる中でその使用頻度、「聴く活動」の内容などから概ね定まってきたが、全曲リストの作成には至っていない。

(4) 「構造化」の研究については、B. ロナガンの「発見の構造」の研究を進める上で重要な人物であったモンテッソーリ教育関係者の急逝により困難が生じ、「聴く活動」の構造化に至っていない。

(5) 事例集作成については、使用曲リスト、「聴く活動」の構造化、いずれも完成に至らなかった為、作成することができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中晴子 吉田直子	4. 巻 38
2. 論文標題 音楽家の耳 トレーニングを活用した幼児期の音楽基礎教育「聴く活動」に関する研究 保育者養成校の学生との実践から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 エリザベト音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中晴子	4. 巻 40
2. 論文標題 音楽家の耳 トレーニングを活用した幼児期の音楽基礎教育「聴く活動」の導入時の使用曲と使用法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エリザベト音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田直子	4. 巻 2
2. 論文標題 子どもの音楽表現を支援できる保育者育成のための考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 池坊文化研究	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中晴子
2. 発表標題 『聴覚』の敏感期と「聴く活動」 音楽家の耳 トレーニングを用いて
3. 学会等名 日本モンテッソーリ協会（学会）第49回全国大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	泉谷 千晶 (Izumiya Chiaki) (20299754)	青森明の星短期大学・青森明の星短期大学・教授 (41101)	
研究 分担者	吉田 直子 (Yoshida Naoko) (90754317)	池坊短期大学・幼児保育学科・講師 (44303)	2018年度に奈良佐保短期大学から移行